

採 蓮

Siren

第十二号

No.12

高松次郎の「塾」——一九七一年度の活動——

藁科英也

はじめに

本稿では、高松次郎（一九三六—一九八）が自宅アトリエで主宰した「塾」の初期の動向について、彼を中心とした紹介を行う。

高松の「塾」に関わる活動は一九七一年から七四年までとされているが、彼が直接運営に携わった期間は最初の一年間であるという。本稿では活動の助手を務めた田島廉仁氏（以下敬称略）より提供された一九七一年度における「塾」の活動記録を高松のメモのうち、公表が可能な内容を御遺族である高松靖子氏の了解を得て、筆者の責任において纏めた。なお、引用した高松のメモは、加筆訂正箇所をそのまま書き起こしたものと、そうでないものがある。

開講

「塾」の開講を告知した、二種類の活字資料を紹介する。

『美術手帖』一九七一年五月号の「告知板」欄に、次のような記事が掲載された（以下、本稿では引用文について太字で示す）。

「塾」開設 芸術全般、その他さまざまな事柄に関する思考と体験の

場。（註一）

連絡先の住所は高松の自宅だが、「高松次郎方『塾』」となっている。雑誌などの公刊物に掲載された「塾」発足の告知は、現在これ以外確認されていない。

『美術手帖』の告知記事の他、詳しい内容を伝える次のような募集要項（活版印刷による）が作られている。

入塾募集要項

名称を「塾」とする。

当塾は、美術を基盤としながら芸術全般、さらには、われわれに関わるさまざまな事柄に対して思考と体験の場にすることを主旨とする。

担当者 高松次郎・藤枝晃雄

研究内容に応じて、随時特別講師を招聘する。

募集人員 第一部 二〇名

第二部 二〇名

資格 原則として一八才以上とする。

開講期間 一九七一年五月一日（火）より七二年三月二十九日（火）までとする。

（但し、八月を除く）

開講日時 第一部 毎週火曜日・午後二時～五時

第二部 毎週火曜日・午後六時～九時

申込期間 一九七一年四月一五日(木)までとする。

申込先 (略)

入塾決定 「塾」に関する説明を兼ねての面談をしたのちに決定する。

面談日時 四月中の毎週火曜日(六日・二三日・二〇日・二七日)4回に渡って

面談する。

時間は、午後二時～五時、六時～九時とする。申込用紙に都合のよい日時を記入して下さい。

経費 入塾費 一五、〇〇〇円(入塾時)

月額 四、五〇〇円(毎月、最終火曜日)

(原資料の数字は全てアラビア数字・他は原文のまま)

記載された申込先住所は『美術手帖』に掲載されたものと同じで、表記が「高松次郎方―塾」とやや異なっている。この募集要項の末尾には、希望の時間帯、希望の面談日時、連絡先を記入して提出する「申込用紙」欄が設けられている。現在であれば、このような募集要項(のチラシ)などは、たとえば学校や画廊といった場所に置かれているが、田島廉仁(一九四八生)によればこの募集要項は画廊などには置かず、さきの『美術手帖』の記事を読んで問い合わせた人間に渡したものであるという。印刷された枚数は不明だが、およそ二〇〇枚程度とされる。また、「募集要項」中の開講期間の終わりを「七二年三月二九日(火)」としているが、一九七二年は閏年に当たり、三月二八日が火曜日である。

高松のメモの断片を基に推測すれば、彼がこのような活動について一九六九年頃から構想を持っていたことが判るが、直接の動機を示す手記のようなもの

は現在まで確認できていない。

それでも、高松が当時の美術教育とは異なったありよう、言い換えれば学校や画廊などといった既存の存在とは異なった「場」といったものを希求していた、と考えることは可能である。この傍証となり得る出来事を求めるとすれば、小林昭夫(一九二九―二〇〇〇)が一九六七年に発足させた「現代美術ベイシクゼミナール(略称・Bゼミ)」に高松が講師として参加していたことや^{註2}、六〇年代末から七〇年代初頭にかけて多摩美術大学の学園紛争を契機に一部の教官たちによって行われた自主ゼミ(ナール)の存在を挙げることができ^{註3}。また、高松は「塾」発足の半年ほど前、一九七〇年一〇月一六日から一八日の三日間、自宅アトリエを使用して、田島、川井調吉(生年不詳)と共に「アトリエ開放展」を行っている^{註4}。

さきに掲げた「入塾募集要項」には藤枝晃雄(一九三六生)の名前が記載されている。当初は高松と藤枝ふたりの協同で「塾」の構想が進められていた。しかし、藤枝は開講前に退き、高松は「アトリエ開放展」に参加した田島を助手として「塾」の開講に当った。開講直前の五月九日、高松次郎は中原佑介(一九三一生)を自宅に訪ね、「塾」への協力を要請している。高松と田島は「塾」の内側にあたり、中原の位置づけは外部から「塾」に協力する、というものだった。「塾名簿」には「責任担当者」である高松と「助手・事務担当」である田島と共に、中原の名前が「相談役」として記載されている。

一九七一年五月一日、「塾」は開講した。七月に活版印刷で作成された「塾名簿」には、面談を経て集まった参加者たち(以下、高松たちのメモに従い「塾生」とする)の名前が第一部・第二部共に二三人づつ、計四六人が記載されている。塾生は美術大学の学生に止まらず、一般の大学生や就職した者もいた。現在、彼らの年齢について詳細な調査を行っていないが、残された記録か

ら、その多くが二〇代ではなかったかと思われる^(註5)。

それでは、「塾」は具体的にどのような活動を予定していたのか。

高松が当初構想していたカリキュラムについて、そのいくつかを彼のメモを基に列記する。

A 定期的なもの

- ① 作品批評 参加者が自宅および教室で制作した作品
- ② 教室制作 課題、材料を提供(ただし、小品で即興的なもの)
- ③ 読書 例えば老子や莊子など

B 不定期なもの

- ① 講師の招聘 講義または参加者の作品批評
- ② 見学会
- ③ 特別技術研究 作品制作上の技術について
- ④ 作品発表会 参加者全員で検討して決定する
- ⑤ フリートーキング 随時

次に開講初日に関する高松のメモの一部を引用する(内容が変わる箇所はアステリスクで示した)。

memo on Mar 8th

五月一日の講義(話し)

1. 田島氏の助手としての紹介
2. 藤枝氏の辞任の件 ↓ 中原氏に関して

(辞任通告は五月六日)五月八日、最通告^{マツ}

3. (2)にまつわる変更(塾生の辞退の問題)
自己紹介(塾生)

4. 塾の発表^{発表} 発想と、その論理 塾生の決定の報告

5. カリキュラムの最検討^{マツ}

6. 規則の件
作るか
作らないか

7. 運営(経営と教課^{マツ})

(なるべく塾生の要望は取り入れる。しかし最終的には高松がその責任において決定する)

経理公開の問題

8. 詳細にわたる問題

- a 読書 教室に於けるもの

- 自宅に於けるもの

① ②

- b 開始時間 特に第二部は六時半までは free time にすべきか

- c その他(記録の問題など)

保留の問題

中原佑介氏に関して

(責任外相談役、及び、非常勤講師)

9. 討論

- x 10. 塾生に対して質問事項 今迄に最も興味の持てた書物

一〜三冊

- x 11. 質問事項 今迄に最も興味の持てた芸術家

(現代田本を除く)

13 少なくとも三ヶ月はジャーナリズムへの資料提供はしない。

(シヤッター・アウト)

14 (塾報の発行)?

(三ヶ月に一回)

(活動主体は塾生におくという案)

◎ 15 記録は、個人を主体にしたものに限る。

16 専用のノートを持参のこと。(手帖でもよい)

× 17 開始の時間。(遅刻せざるをえない人を考慮)

次回

18 レポート提出

四百字 原則として三〜五枚以内

① 本人が最近最も興味を持った本、又は文章についての感想。

六月の第二週に提出

② 現在、今迄最も興味の持っている芸術家を一人選び、その芸術家について、(原則として現代田本を除く)

③ 状況と

④ 塾はどうあるべきか

⑤ 二日は教室に於ける作品制作

⑥ 二五日、合評会

⑦ 個人面談の日、五月中に一度、

⑧ 見学者の件、補欠の件、椅子使用の問題

保留

規則↓作らない方向

*

塾としての公的組織

自然発生的

本質的にアナーキーである共同体

高松による連続的な読書

① 庄子

② レオナルド・ダ・ビンチの手記

③ セザンヌの手紙

④ 新しい哲学(註6)

*

◎ 個人面談の中で、全員に計って決定すべき問題は、

高松の方から、あるいは、その発言者・直接に、

全員に、ときには、その部のみ、ときには、一部

二部共通に提案する。

*

◎ (必ずしも)美術の文脈から語らない。↓教室に於ける作品制作。

◎規則を作らないことに関して、

*

〔前近代的不ならなための努力、
超近代的な方向への努力〕

*

五月一八日に予定すべきこと

◎全員に計るべき問題

見学者の問題（高松としては普通の日は、原則的に拒否）

二部に関して、一部の人が四人、二部

にくることを希望している件

第に部に関して、遅刻せざるをえない人のために、

◎名簿の配布（共同討議）

*

◎始めの二・三ヶ月は塾生の動向がつかみ難いと思うので、カリキュラムも断片的にならざるをえないだろう。

「塾」とは言うものの、高松の考えていた彼と塾生の関係は、教師と生徒という垂直的なありようよりも、より水平的な状態を考えていた（「自然発生的」「本質的にアナキーである共同体」ことが理解される。とは言え、年長者である高松が「塾」という場を参加者＝塾生たちに提供する以上、彼はカリキュラムの編成から金銭の具体的支出に至るまで、全体の責任者たるを免れない。彼自らもこの点に矛盾を感じていなかった（このことを、塾生たちがどのような考えていたかは別の問題である）。また、後述することになるが、「塾」の活

動を外部（ジャーナリズム等）に向かって告知することも行わないことは、開講した早い時期に申し合わせられたものと思われる。

初日である五月一日と翌週の一日はいわばガイダンスであり、高松と塾生たちが揃った、いわば顔合せが主だった。高松は美術について、あるいは思想について語る一方、自宅アトリエを用いての活動であるため、雨の日以外は玄関から入らず、直接アトリエのテラスから出入りするように、ということまで塾生たちに伝えなければならなかった。

活動の記録

本項では、高松次郎と田島廉仁による記録を基に、各週の活動を判明した限り掲げる。特に講師名を記していないものは、全て高松が担当している。第一部と第二部のタイトルが同じものについては「（第一部・第二部共）」と記した（これはそれぞれの塾生たちと一緒にしたことを意味しない）。人名表記は、原則としてノートに記されているままとした。

一九七一年五月一日（火）

（第一部・第二部共）ガイダンス

五月一八日（火）

（第一部・第二部共）ガイダンス

五月二五日（火）

（第一部・第二部共）講義「意味と無意味」講師・中原佑介

この講義はまず約一時間、中原の『ナンセンスの美学』（現代思潮社 一九六二）を高松が読み、その後約二時間、中原を囲んで討論を行った。

六月一日(火)

(第一部・第二部共)合評会

「合評会」は「塾」教室内部での制作とは異なり、塾生が自宅で制作した作品に関して、討論を行う(以下同)。

六月八日(火)

(第一部・第二部共)合評会

六月二十五日(火)

(第一部・第二部共)「教室に於ける制作」および『老子』の読書

六月二十二日(火)

(第一部)討論「前回の『教室に於ける制作』について」

(第二部)講義「カシミール・マレービッチ論」講師・中原佑介

六月二十九日(火)

(第一部)講義「記号について」講師・針生一郎

(第二部)討論「前々回の『教室に於ける制作』について」

七月三日(土)

草月ホールにて映画鑑賞「チェルシー・ガールズ」(監督・アンディ・ウォーホル 一九六六)^(註7)

これは自由参加であり、塾生全員のうち約二三人が参加した。鑑賞会終了後に堀浩哉(一九四七生)をリポーターとした「自由会合」を渋谷の喫茶店で行う(参加者の人数および高松が参加したか否かについては不詳)。

七月六日(火)

(第一部・第二部共)講義「老子論」講師・斎藤義重

七月十三日(火)

(第一部)討論「制作過程と内容」および『老子』(第四〜七章)の読書

(第二部)討論「制作過程と内容」および『老子』(第七〜一〇章)の読書

この「制作過程と内容」に関する内容については、高松のメモによって後の項で紹介する。

七月二〇日(火)

(第一部)『老子』(第八・九章)の読書および討論「制作過程と内容」

(第二部)『老子』(第一章)の読書および講義「李禹煥氏を囲んで」講師・李禹煥

七月二十七日(火)

(第一部)『老子』(第一〇・一一章)の読書および講義「マレービッチ論」講師・

中原佑介

(第二部)『老子』(第二〜三章)の読書および講義「シュビッターズ論」講

師・中原

八月三・一〇・一七日 夏期休講

八月二十四日(火)

(第一部)『老子』(第一四・一五章)の読書および講義「シュビッターズ論」講師・

中原佑介

この講義は、まず高松次郎が中原の『現代彫刻』(角川新書 一九六二)のシ

ュビッターズの章を読むことから始まった。

(第二部)講義「ブランクージ論」講師・中原

八月三十一日(火)

(第一部)合評会

(第二部)第一部の塾生も参加したフリートークキング

この日は、台風二三号のために当初の予定を変更したという。

九月七日(火)

(第一部)合評会および討論「塾の運営について」

(第二部)討論「塾の運営について」

この日の討論の主な議題は、「見学者について」「個人面談(その方法)」「講師招聘」「課外活動」「老子」以外の読書。

九月一四日(火)

(第一部)講義「ブランクージ論」講師・中原佑介

(第二部)合評会

以後、中原はヨーロッパに出かけ、しばらく「塾」講師を務めていない。

九月二二日(火)

(第一部)合評会

(第二部)合評会および高松による報告「制作過程と内容」

九月二八日(火)

(第一部)合評会

この日、第二部の活動は不明。

一〇月五日(火)

(第一部・第二部共)講義「松澤有氏を囲んで 観念合成法」講師・松澤有

一〇月二二日(火)

(第一部)『老子』(第二・二五・二七・三一・三五・三七章)の読書

(第二部)「教室に於ける制作——共同制作」

一〇月一九日(火)

(第一部)合評会および「教室に於ける制作」

(第二部)『老子』の読書

一〇月二六日(火)

(第一部)『老子』(第八章まで)の読書

(第二部)講義「記号論」講師・針生一郎

一一月二日(火)

(第一部)「教室に於ける制作——共同制作」および「合同合評会(仮称)」の打

ち合わせ

(第二部)『老子』の読書および「合同合評会(仮称)」の打ち合わせ

第一部の「教室に於ける制作——共同制作」内容は前月一二日に第二部が行ったものと同じ。

「合同合評会」は、一九七二年三月に「塾」(高松アトリエ)を中心に行われた大規模な合評会(後の項で紹介する)。

一一月九日(火)

(第一部・第二部共)講義「老子・その人間像」講師・山田統

一一月一六日(火)

(第一部・第二部共)講義「中原佑介氏を囲んで」講師・中原佑介

今日のソヴイエトおよびヨーロッパ美術の報告および数学論。

一一月二三日(火・祝)

(第一部・第二部共)フリートートキング「発表の方法について」

この日の内容は、前掲の「合同発表会(仮称)」に関する意義や目的に関するフリートートキング(高松はこの語彙を「討論」とやや分けて用いているように思われる)であり、共に高松の他に塾生が各一名司会を務めた。

一一月三〇日(火)

(第一部・第二部共)合評会および討論「塾、合同合評会について」

一二月七日(火)

(第一部・第二部共)「合同合評会(仮称)」の打ち合わせおよび合評会および討論「塾のカリキュラムについて」

一二月一四日(火)

(第一部)パネル・ディスカッション「不在性について」および「新聞を読んで」

(第二部)パネル・ディスカッション「不在性について」

この日は、中原の講義を予定していたが、彼が急用のため内容を変更した。

「不在性について」は高松がレポーターとなつて彼の「世界拡大計画 第一章」(註8)について語り、「新聞を読んで」は田島がインド・パキスタン紛争について報告した。

十二月二日(火)

(第一部)塾生によるパネル・ディスカッションおよび講義「現代数学講義」講師・中原佑介

(第二部)討論「合同合評会(仮称)について」および講義「現代数学講義」講師・中原佑介

第一部のパネル・ディスカッションと第二部の討論はテーマが異なっていたと考えられる。中原の講義は遠山啓『現代数学対話』(岩波新書 一九六七)をテキストとした集合論の講義。

十二月六日(日)

(第二部)合評会および「教室に於ける制作」、「自由討論」

この日は第二部のみの特別講座だった(理由は不明)。

十二月八日および一九七二年一月四日 冬期休講

一月一日(火)

(第一部・第二部共)「教室に於ける制作」

一月十六日(日)

「合同合評会(仮称)のための全体打ち合わせ会議」

この会議は、第一部と第二部の塾生が合同で行った。期間を三日間とすることを決定。

一月十八日(火)

(第一部・第二部共)講義「現代数学講義(第二回)」講師・中原佑介
一月二十三日(日)

「合同合評会(仮称)のための全体打ち合わせ会議」

この会議は、第一部と第二部の塾生が合同で行った。場所と日時、名称を「仮称合評会」とすること、主旨、対外的なアピールの可否などを決定。

一月二十五日(火)

一月三〇日(日)

この両日は、高松のメモでは「塾生パネラーによる討論」(二五日)、「一部の特別授業」(三〇日)とのみ記されており、詳細は不明。

二月一日(火)

(第一部・第二部共?)講義「ぼくのゼザンヌ論」

その他、「仮称合評会」の決定事項が報告される。

二月六日(日)

「仮称合評会のための全体打ち合わせ会議」

この会議は、第一部と第二部の塾生が合同で行った。カリキュラムとしての「仮称合評会」のあり方と内容、責任が問われた場合の対応が話し合われた。

二月八日(火)

(第一部・第二部共?)講義「現代数学講義(第三回)」講師・中原佑介

二月十三日(日)

(第一部)「教室に於ける制作」および「自由討論」

この日は第一部のみの特別講座だった(理由は不明)。

二月十五日(火)

(第一部)討論「『作家の言葉』による討論」

高松のメモにはアーサー・エディントン(一八八二—一九四四)のものと推測される言葉が記されているが、エディントンは天体物理学者。

この日、第二部の活動は不明。

二月二二日(火)

(第一部)講義「位相数学」高松による中原氏の追補、討論「『作家の言葉』に

よる討論」および塾生によるパネル・ディスカッション

(第二部)「ル・クレジオの読書」

第二部に使用されたテキストは不明。

二月二十九日(火)

(第一部・第二部共)講義「寺山修司氏を囲んで」講師・寺山修司

三月五日(日)

「仮称合評会のための全体打ち合わせ会議」

この会議は参加者のみであったと考えられる。

三月七日(火)

(第一部)「ル・クレジオの読書」および「仮称合評会の連絡」

(第二部)塾生によるパネル・ディスカッション

第一部に使用されたテキストは高山鉄男(訳)『発熱』(新潮社 一九七〇)所載の「ポーモンが痛みを知った日」であると思われる(二月二二日第二部も同じテキストか)。

この日の活動について、高松のメモには「二月七日」の日付が記されているが、前後から判断して三月とした。

三月一四日(木)

(第一部・第二部共)「仮称合評会準備を主とした自由講座」

三月一六・一七・一八日(木・土)

「仮称合評会」

高松のアトリエをはじめ、武蔵野市公会堂や井の頭文化公園内などで開催された。

三月二二日(火)

(第一部)塾生によるパネル・ディスカッション

(第二部)講義「現代音楽論」講師・秋山邦晴

三月二八日(火)

(第一部・第二部共)「第一期最終講座」

約一年間の活動を通覧すると、さきに引用した高松のカリキュラム構想は、ある程度こなされている、という印象を受ける。

「定期的」な活動である合評会は、参加者全員が提出したわけではなく、週に三〜五人の塾生の作品を批評し合うもので、塾生一人当たり、二、三ヶ月に一回というペースだったと推測される。高松による『老子』講読については、その全体像や概要は不明であるが、「教室に於ける制作」については彼が示した課題が残されている(後出)。

「不定期」なもの、特に外部からの講師招聘は「塾」の相談役を務めた中原佑介を除けば美術評論家の針生一郎(一九二五生)、美術家の斎藤義重(一九〇四―二〇〇一)、松澤宥(一九二二―二〇〇六)、李禹煥(一九三六生)、演劇の寺山修司(一九三六―八三)、音楽評論の秋山邦晴(一九二九―九六)、中国思想史家の山田統(一九〇六生)であり、山田以外はいわゆる「現代美術」に(直接・間接問わず)関わる人物たちだった(註9)。当初は高松自身も文学、演劇、音楽、建築など幅広い外部講師の招聘を考え、また塾生の側も多彩な講師の顔ぶれを期待していた(註10)。その意味において、外部講師の招聘は不活発なものと評されるかも知れない。しかしながら、「塾」は大学などとは異なり週一度、しかもわずかな時間での活動であり、定期的な活動の計画に影響が及ぶことは避けなければならなかったことを考えれば、外部講師の招聘が縮小しても仕方がなかっただろう。

高松が記したメモの内容を追う限りでは、斎藤と李の講義は高松が講読を重ねた『老子』理解を補うものとして進められており(註11)、松澤の講義も中原の現代数学、針生の記号論と様相を異にしながらも、思考の方法論という意味で

は共通する。また、美術と直接関わる講義を見ても、活動後半に行われた高松のセザンヌをはじめ、中原のマレーヴィッチ、ブランクーシ、シュビッタースなどの作家論は、いわば二〇世紀美術入門という趣が強い。これに対し、「いま・ここ」で起こっていることを塾生に対してジャーナリストイックに解説し、理解させようとするようなカリキュラムは設けられていない。高松は、『老子』の講読が象徴するように、古典的な思想あるいは基礎的な思考といったものを重視していたと推測することが可能である。

なお本項のしめくりとして、ここに掲げた日にち以外にも、高松は助手である田島をはじめ、中原や他の講師たちと数多く打ち合わせを重ねていることを強調しておきたい。

「制作過程と内容」

それでは、高松は塾生たちにどのような課題を与え、何を語っていたか。

一九七一年六月一五・二二・二九日の三週にわたって行われた「教室に於ける制作」において高松は塾生たちに対して次の課題を与えている。

問1. 提出された物体（これは発泡スチロール引用者註）に対して、文字又は文章で表現して下さい。

問2. 提出された同じ物体に対して、指定の紙の上に、文字または文章以外で表現して下さい。

問1・問2の両方の問題を共に未完成でも六時より八時三〇分（二時より四時三〇分）までに完了して下さい。

⑤提出された物体に変化を与えないこと。

「教室に於ける制作」は、各塾生たちの作品を高松や塾生同士が見、討論する、という形式だった。高松のノートには、この課題の意図と思われるメモが、続けて記されている。

見るということの、主体と客体との問題

この課題から、約半年後の一九七二年一月一日に出された課題。

教室に於ける制作（文章表現）―（言語表現）

「文字または文章を書かないください。」

○この黒板に書かれている右の一文に関連して、文字または文章を指定された用紙に書いて下さい。

このふたつの課題は、この時期の高松の作品《石と数字》（一九六九）や《日本語の文字》（一九七〇）に見られる、世界とそれを記述しようとする人間の関係を問おうとする姿勢と直に結びついている。

高松が「塾」の準備のために記したメモの中で、最も纏まりがある内容が、一九七一年七月一三・二〇日と九月二一日に行われた討論（あるいは報告）「制作過程と内容」についてである。これは、塾生たちと討論するための、いわば「たたき台」として彼が記した草稿であり、その内容は彼が分析した「作品」制作とその営為＝積み重ねの原理についてである。

六月三〇日、最初の構想が彼のノートに現れている。

問題点

- ① 日常とは何かという問いと抽象性が重要、
- ② 制度は日常性をわい小化し、プロセスを短絡させる、
- ③ 他人が見る場合は上からの推測、
- ④ 感性の感性は存在しない！それは即自存在的である。（そのために、プロセスには理性の介入する必要がある）
- ⑤ 理性はつねに、感性の統括をする。

理性の理性だけが、理性を統括する。

何が自分にとって、より面白いことなのかというような

何がこの場合より正当であるのかというような

- ⑥ 理性の理性が哲学。（「新しい哲学」参照）
- ⑦ 技術の技術が教育であるべきである。（自己教育を含む）（理性の働くことが多い）
- ⑧ 感性的指向は、つねに物体（実在）に関する指向性となる。

引き続き、七月一九日にも記されている。

制作過程と内容

高松のメモ71-7-19

「形式」から具体的な制作が問題となる。

① 一般的な日常的世界

内容…すべての経験、（事物との触れあい、

知覚、思考、想像、情報経験、自己の制作経験、
…その他）

性格…倦怠的混在

② ある出発の基盤

内容…ある時点での興味に対する積極性、

混在の中の発生、立ち止まるということ、

性格…感性的（綜合的作用）

註 ↓ ①と②の境界は、時間的でなく、

空間的であるが、空間的境界もま

た、流動的、連続的である。

受動性と、能動性の境界線上、

③ その興味の強化のための意識化、（ある出発）

内容…1の検討、及び、行動(作業)に意義

があるか否かの検討は、

具体的には、自分にとって、何が

最も面白いかというようなことの

検討、

性格…理性的(抽象化作業)

やや特殊な日常性の発生、

(虚構性)？

反省的

③ ①と②に関する試行

内容…(具体的作業衝動)、たとえば、スケッチや模型、

ときには、空想的作業、のときもある。

性格…賭け、具体性、

やや特殊な日常性、(虚構性)？

(以下同じ)

④ ③に関する感性的検証

内容…②の具体性抽象性と、③の具体性との

内容的統括

性格…感性的(綜合作用)

賭けの回答、

やや特殊な日常性、(虚構性)？

註 ↓ ②③④は、時間的順序が

あるとは限らない。つまり同時的にも存在

しえる。空間的境界があるとしても、流動

的、連続的である

② ④の意識化を通しての①②③の再検討

内容…②の再検討、理性のための理性Ⅱ

哲学(的)

③の再検討、技術のためのに関する技術

検討。思考への思考。

の発生Ⅱ自己教育の基盤、……これらを

綜括的に意識することが教育の基盤、

④の(検証結果の)意識化、それを通して

の①の再検討、

それに関連する問題を、できる限り広範囲に

考えるまた、その問題の限界を考える。

次の作業に意味があるか否かの検討、

性格…抽象化作業、(理性、具体性、

感性の総括)超越的性格

反省的性格 (0にもどる 初心にかえる)
非日常的

③ あらたなる試行

内容性格: ③との相違は、避けようとしても不

可能な、経験の量によって決定さ

れる。③の技術的(註12)具体化作業、賭け。

技術に関する技術的実験を含む。

内容: ③と現象的には同じ性格、具体的
な内容の性格の相違のみが問題。

具体化作業

非日常的

④ ③に関する検証感性的検証

内容: ②の抽象性と、③の具体性との

内容的総括

性格: 感性的(綜合作用)

賭けへの回答

感性の感性は存在するか、

(多分存在しないであろう。)

註 ↓ ②③④は、時間的順序が

あるとは限らない。同時に存在する。しえる。

空間的境界があっても、流動的、連続
的である

②③④ 以後について

以下、②③④②……と続きえる。

それは、展開、又は停止の必

要性(必然性)が発生するまで、くりかえされる。

もちろん、④で終ることもありえるが、

(最低限、④までは必要条件となるべきであろう。)

停止 これらの一連の経過が停止され終了した

と認めえるとき、それは、

曲常 一般的日常性となる。

④=①

(それ以前とは変容してはいるが、)

このメモの中に「教育の基盤」という語句があることから、このメモ全体を「塾」における活動、諸カリキュラムの連関として読むことも可能だろう。高松にとっては作品の制作も「塾」も、等価だったことになる。だからこそ、彼

自らの制作上の関心を「塾」に持ち込むことが可能となった。その意味では、塾生たちは高松次郎という芸術家が、最も直近に抱えていた問題に触れていたことになる。

高松は一九六〇年代末から七〇年代にかけて、階梯を踏まえた作品制作を行うように努めていた。その連関において彼のこのメモは、その制作原理の根拠方法論でもある。重要な点は、「私」たる主体が対象となる客体（これは、「もの」や「物質」から「作品」に至るまで、様々な段階がある）に加える操作の手順（手続）に従って記述されているが、主体が自らに対して懷疑を抱く可能性について、ほとんど顧みられていないことである。それにかかわる唯一の語彙が「賭け」であるが、このシステムを検討する限り、彼の記す「賭け」は目的地までの交通手段を選ぶことと大差はなく、主体のゆらぎ、不確定さまで織り込まれていると評価することはできない。彼は「再検討」や「検証」という作業を組み込んではいないが、それは単なるフィードバックの機能しか与えられていない。これは主体を客体として見つめようとするまなざしの欠如であり、同時に他者の存在が顧慮されていないことでもある。

この問題は、塾生たちが集団で行うことを目的に高松が提示した課題にも現れている。

一九七一年一〇月二日と十一月二日に行った「教室に於ける制作——共同制作」の課題。

教室に於ける作品制作

題名「共同制作」

ルール（一）（大項目）

複数の人が、一つの対象（課題）に対して、各々一定の持ち時間の中で、順に制

作を受け持つこと。回数を重ねてもよいが、同じ順番で、各々が同じ回数制作を受け持つこと。

ルール（二）（詳細）

指定された紙面の中に、指定された用紙を一枚一枚選び、三分以内に、任意の位置に、指定された接着剤で貼り付けること。

注（一）

指定された紙面、及び用紙は、（ルール（二）（詳細））以外の加工を加えてはならない。

注（二）

指定された紙面の外側にはみ出して、あるいは、それ以外の位置に、用紙を貼ってはならない。

注（三）

指定された以外の物体を、指定された紙面に貼ることはできない。また、指定された以外の物体に関しては、当制作とみなすことはできない。

注（四）

指定された用紙の接着面、及び位置以外に、接着剤を付着させてはならない。

注（五）

制作参加者は、以上のことを守ったうえで、必ず実行しなければならない。

参加者たちはこの課題を示された際、お互いが話合ったと考えられるが、これは会話をしなくとも可能だろう。いわば、自らの行為で起こった予測不可能な事態（他の参加者たちの反応）に対し、参加者がどのように反応を重ねるか、というゲームである。

「制作過程と内容」の内容に立ち戻れば、既述のような問題を抱えながらも、最初の項目に記されている「形式」から具体的な制作が問題となる。」という一節は、一九六三年に高松が記した『不在体』のために^{〔註13〕}で彼が規定した絵画という「もの」の「物質的実在」を明らかに踏まえているし、「4th 0th」の無限反復は、『不在体』のために」を含む彼の六〇年代に積み重ねた思索「世界拡大計画」のエッセンスである。

高島直之は高松の「方法論」の意義について次のように記している。

：高松が生涯をかけて表現してきたことは、実在性からどこまで遠くへ行けるかという実験であり、その仕事に完成はなく、けっして到達がないという点です。重要なことは不在のもつ、より純粋な緊張感をいかに延命させていくかという「方法論」こそが、高松の手中に残ったということです。^{〔註14〕}

「仮称合評会」

前項で記したとおり、高松次郎のメモ「制作過程と内容」は他者、さらには対象と向き合う姿勢を考慮しているとは言い難く、モノローグ的な構造である。

その一方で、高松は「塾」においてダイアログを重視していたこともまた事実である。その代表的なカリキュラムとして一九七一年六月一日から絶えず続けられた合評会がある。ただし、彼のメモを読む限り、塾生たちが自宅で作した作品を「塾」に持ち込み、批評し合うという行為と、「制作過程と内容」に記されたシステムをどのように統合するか、といった思索は行われていない。

通常、毎回の合評会では塾生全員の作品を批評することはできず、高松は「塾」の活動が本格的になった一九七一年夏ごろから自宅アトリエおよびその周辺の屋内外で第一部と第二部合同の合評会を行う構想があつたと推測される^{〔註15〕}。この構想が、高松と田島廉仁との間の具体的な打ち合わせが行われたのは九月二〇日のことで、この段階では翌月の日曜日である一〇月二四日か一月中旬に開催する予定だったが、結局七二年三月一六日から一八日にかけて、「仮称合評会」という名称のもとに実施された。

この合評会のために塾生たちが制作した謄写版刷りの『仮称合評会ガイドブック』によれば、三月一四日の時点で高松と田島を含めた四一人の参加が予定されており、すでに作品とその発表場所が決まっている参加者は次の通りである（発表場所が複数にわたった参加者もあり、左記は延べ人数。また場所の名は当時の呼称）。

高松自宅アトリエ	二〇人
井の頭公園（公園駐車場、公園附近の歩道、中ノ島池）	三人
武蔵野市公会堂	一人
東京都立教育研究所三鷹分室山本有三青少年文庫	一人

高松は自宅アトリエ、井の頭公園、武蔵野市公会堂でそれぞれ《複合体1》、《複合体2》、《複合体3》を制作している。これが、彼が「複合体」という作品名を用いた最初の作例となつた。「仮称合評会」で発表されたと考えられる「複合体」は、杭や立っている丸太（木製の電柱が途中から切り取られたものと思われる）などの切り口に砂を円錐状に盛り上げたものである。彼はガイドブックに井の頭公園付近での《複合体2》は「一七日午後一時」から設置することを予告している（これは、仮設的性格の強い作品に備わるイヴェント性につ

いて、高松が考慮していた証左となる)。

「仮称合評会」は「塾」の活動であり、活動を対外的には告知しないという原則に従うとすれば「仮称合評会」に各自が提出した作品も非公開となるが、自宅アトリエ以外、公共的な空間を用いての作品設置に関してこの原則を当てはめることは出来ない。結果としてこの問題については、ごく限られた関係者には通知する、という曖昧な決着が図られた。高松の「複合体」も本来ならば非公開のはずである。しかし高松本人は「仮称合評会」に発表した作品は画廊などで発表する作品との間に違いがあるという認識は持つておらず、後に『美術手帖』一九七三年一月増刊号に掲載したいという峯村敏明(一九三六生)の要請によって「仮称合評会」で制作した「複合体」の写真資料を提出している¹⁶。

高松の「複合体」の写真掲載をめぐるのは、その後塾生内部から「塾」の原則に外れるのではないか、という疑義が出され、高松本人が塾生たちに対して事情を説明する結果となった。これは「塾」の活動をめぐり、高松と塾生たちとの間にずれが生じた一例だが、「仮称合評会」が当初予定していた期日から大幅にずれ込んだ理由もここにある。高松が開催そのものを塾生たちと共に運営することを目指したため、合同で合評会を行うことの意義付けや開催そのものの可否などをめぐって各自の認識と主張のずれが露わとなり、討論に多くの時間が費やされたためである。

そのさなか、高松は「塾」について自らの定義付けを行っている。

一九七一年二月一〇日のメモ。

当「塾」には、現実指向も、ユートピア指向も存在しえないだろう。塾は現実の中に形成されるべき、新たに付け加えられた、小さな現実そのものなのであ

る。現実指向とユートピア指向が混線し、またいずれかに対しての仮説的な場としても存在しえない。教育が、一方的なコミュニケーションの成立を条件としているなら、塾は、そこに参加している人のすべてが、コミュニケーションの発信と受信の原点であるだろう。

また複数の人たちが理想的な関係をもつべき共同体としての単純化しえる論理を存在させるには、何らの前提をももってはいない。塾の構成方法は、論理の単純化よりも、その複雑化にしか加担してはいない。

塾は、厳密な意味で教育機関にはならないであろう。それはあくまでもコミュニケーションの場であり、最大限、自己教育の場にすぎない。

しかし、共同体的の可能性は存在しえる。それは、あくまで混線したコミュニケーションと、永遠に否定をくりかえすユートピア指向という状態を通してしか存在しえない。

塾は、特定の何ものかには向かない。また逃避することもない。

結果として、「仮称合評会」は「塾」の一九七一年度の活動をしめくくる大きなカリキュラムとなった。ただし実施に至るまでの経緯などから、高松や塾生たちはこれを「卒業制作」的なものと考えてはいなかった。

一九七二年三月二八日、最終講座が行われた。

この際の高松の挨拶文を掲げる。

塾一期の終了にあたり、

塾生の皆様に、

事務担当者 高松次郎 より

塾一期 塾生の皆様

*

昨年の五月十一日より、本日、三月二十八日をもって終わる当塾のカリキュラムを完了したことは、相談役、中原佑介氏、及び、助手兼事務担当者、田島廉仁氏の多大なる誠意と尽力によるばかりではなく、塾生皆様方の強固なる意志と、絶大なる努力なくしてありえなかったことはいまでもありません。

なかでも、この十一ヶ月の間に、個人の問題を越えて、当塾のより全体に関わる仕事で努力をおしまれなかった方々が、この期間の塾を支えてきた一面には言葉に尽せないものがあると思われ、特別に責任担当者から感謝の意を表わすべきかもしれません。しかしながら、眼に見えないような部分に於いて、また、責任担当者には感知しえないところで、一人一人の熱意にあふれた力強い努力がなされたことは、想像に難くなく、それに対して考え及ぶとき、もはや個別的な感謝の表明は避け、皆様方全員に対してのみ言葉を述べるべきであろうと考えます。

皆様、どうも有難うございました。

昨年の五月十一日から、本日、三月二十八日までの当塾の、カリキュラムを主体とした経過を、塾一期と呼びたいと思いますが、当然、それに関するさまざまな批評が存在する筈であり、責任担当者としても、塾生の方々からの多くの意見を聞きながら、今後も塾に関する思考を続けていきたいと思っております。というのも、当塾は、本日ですべてが終わったわけではないと考えるからであります。今から塾二期ともいふべき、今後またれるカリキュラムの作成を考える必要があると思われまじ、また、それ以外にも形式を越えて存在する塾の一面を、今後に於いても無視しえないものとして思慮するためであります。

今、ここで責任担当者の一人の意向をいうべきではないと思いますが、単な

る希望として述べるとすれば、塾二期は、おそくとも来年五月までには始めたいと思っております。それも、前に触れましたように、塾一期の批評をふまえ、まず第一に一期関係者の意向をよりよいと思われる方向で集約させながら、新しい可能性の追求を基礎にして遂行していきたいと思っております。

塾二期に参加を希望される方はいうに及ばず、一期のみで当塾を離れられる方々も、さきにいりましたように、塾が形式を越えても存在している部分を考えるとき、決してこれからの塾とも無関係であると考えるべきではないように思われます。従って、今後いずれの方向を選ばれるにせよ、責任担当者としては、いまここで、皆様方全員に対して今後ともよろしくお願いいたします、ということをお願いいたします。

一九七二年三月二十八日

塾 責任担当者 高松次郎

おわりに

一九七二年四月一六日、日曜日に第一部と第二部合同(自由参加)による会合が持たれ、塾の今後が話し合われた。「募集要項」に記されていた「開講期間」以後も継続した活動を希望する声は、七一年の夏ごろからすでに一部の塾生から寄せられていたからである。

その後、「塾」は塾生たちの自主運営に委ねられ、高松次郎と田島廉仁は実質的な活動からは退いた。一九七三年七月には「塾二期生」募集の原案が纏められ、高松が「責任担当者」、中原佑介が「相談役・講師」として名を連ねているが、田島の名前は無い。

1…「告知板」『美術手帖』第三四二号 一九七一年五月 三四頁
 2…「再録文庫」高松次郎 演習ゼミ、薬科「文獻解題」高松次郎——一九七〇年代の立休を中心」千葉市美術館 二〇〇〇年 一一六—一一八、一二二頁
 3…例えば、多摩美術大学では一九六八年以降の学生運動の中で、学生と教員の共催による「自主ゼミ」が組織的に開催されていた。

4…「今月の焦点」ワイド・アングル 高松次郎の「アトリエ開放展」『美術手帖』第三三三号 一九七〇年二月 一三九頁

田島廉仁は一九六九年に多摩美術大学油画科に入学した後、高松次郎を自宅に訪ねたという。以後、七四年まで高松次郎の助手として『万物の碎き』（一九七〇—八〇）などの制作を手伝っていた。田島の記憶によれば川井調吉はアメリカで美術を学び、当時帰国中だった人物とことが、不詳。

また、自宅での作品発表については、次のような高松の自筆文庫がある。

高松次郎「今月の焦点」ワイド・アングル 日常空間での表現とは？ 彦坂尚嘉の「自宅」個展『美術手帖』第三四四号 一九七一年七月 二頁

5…高松（および田島の記録には五〇人くらい面接希望者のメモがある。このメモは「塾名簿」と一部一致しておらず、高松は最低でも六〇〜七〇人を面接したものと思われる。

6…これは他のメモとの比較から、次の書籍名であると思われる。

山下正男『新しい哲学 前科学時代の哲学から科学時代の哲学へ』培風館 一九六七年

7…「チェルシー・ガールズ」はフィルムアート社主催による「フィルムアート・シネマテーク」の一環として、左記の通り上映された。

七月三日（土） 草月会館ホール 午後二時三〇分、午後六時三〇分

七月五日（月） 紀伊国屋ホール 午後二時

なお、「草月シネマテーク」と題された映画上映会は、一九七一年三月で終了している。

本項のデータは、常見美智枝氏（財団法人草月会）の御教示による。

8…「世界拡大計画」は一九六四年以降、高松次郎が折に於て発表した文章である。当日、高松が取り上げたテキストが具体的に何であったかは現在不明である。

一九七一年当時、書店でも比較の入手しやすかった高松の「世界拡大計画」に関わるテキストは、羽仁進・編『戦後日本思想大系 一二 美の思想』（筑摩書房 一九六九）所載の「世界拡大計画——不在性についての試論概説」（初出「デザイン批評」第三号 一九六七年六月）だった。この「世界拡大計画」は、一〇七までの章に分けられている。

現在、高松が公表した「世界拡大計画」の全体については左記の著作集に纏められている。

高松次郎（編集委員 高島直之・真武真喜子）『世界拡大計画』水声社 二〇〇三年七月二〇日

9…当時、山田統は國學院大学教授であり、著書に『老子』（角川新書 一九五七）がある。高松が彼に講師を依頼した経緯は不明。

10…講師案として高松のメモには映画の飯村隆彦（一九三七生）、演劇の唐十郎（一九四〇生）、佐藤信（一九四三生）、文学の金井美恵子（一九四七生）、富岡多恵子（一九三五生）、倉橋由美子

（一九三五—二〇〇五）、建築の原広司（一九三六生）、磯崎新（一九三二生）、舞踊の土方巽（一九二八—八六）、「ハプニング・イベント」（メモのままだの刀根康尚（一九三五生）などの名前がある。また、塾生からは赤瀬川原平（一九三七生）の名前が挙げられている。

11…一九七一年の「塾」の活動の中でも、高松の「老子」講読は他のカリキュラムと比較すると傾向が異なるように見えるため、目立っている。同じ年、斎藤義重も「老子」に関心を持ち、彼の周囲の肝煎りで斎藤による「老子」に関わる自主ゼミが開かれていたことについて山下菊二（一九一九—八六）が証言している。斎藤の「老子」に対する関心を示す自他の証言はいくつかあり、高松との関係において注目される。

斎藤義重 針生一郎（聞き手）『ディアログ』25 斎藤義重『みづる』第八〇六号 一九七二年三月 五二頁

小清水漸 菅木志雄 高橋雅之 二村裕子 本田真吾 守屋行彬 山下菊二 針生一郎（司会）『座談会 ゼロの基軸 斎藤義重を語る』『美術手帖』第三七一号 一九七三年九月 九三頁

高松次郎「フラッシュ」『塾』 斎藤義重氏への手紙 斎藤義重展に於て「みづる」第八〇六号 一九七三年九月・一〇月 一一六—一一七頁

若松基「いくつかの断片——斎藤義重の怒り——」『斎藤義重展図録』斎藤義重展実行委員会 二〇〇三年一月二五日 一〇〇頁

12…この箇所二文字判読不能。

13…註8に揚げた高松の著作集を参照のこと。

14…高島直之の〈不在〉への想像力——「世界拡大計画」をめぐる「高松次郎——思考の宇宙」府中市美術館 北九州市立美術館 二〇〇四年 〇一〇頁

15…正式な「塾」のカリキュラム（合評会）かどうか判断としないが、塾生による野外での展示が世田谷区立烏山中学校近辺で一九七一年の九月二六日（日）と十一月六・七日（土・日）に行われている。

16…峯村敏明（構成）『作品構成・現代美術』72『美術手帖』一九七三美術年鑑 第三六三号 一九七三年一月（増刊）「六四」頁

「追記」本報告を纏めるに当たり、資料を御提供賜りました田島廉仁氏をはじめ、高松靖子、Yumiko Chiba Associates、常見美智枝（財団法人草月会）各氏の御協力を賜りました。末尾ながら謹んで御礼申し上げます。

（二〇〇九・二・一九 薬科記）

Takamatsu Jirô's "juku" in 1971

Hideya Warashina

Takamatsu Jirô (1936 – 1998) was an artist who played an important role in post-World War II art in Japan. In particular, he experimented with a reconfirmation of the visual arts through his ontological and epistemological approach, as seen in his series of paintings on canvas created in the latter half of the 1960s that solely depict the “shadows” of figures and objects, and his paintings and three-dimensional works that addressed the subject of perspective methods. These experiments greatly influenced his contemporaries.

Takamatsu used his home studio (a tiny space less than 40 meters square, something possibly hard to imagine by those who haven't lived in Japan), and held regularly scheduled private seminars. He called this seminar a private school or *juku*, a term used in Japan from the Edo period to signify a privately run educational institution. Takamatsu was only directly involved in teaching students at this *juku* for one course, from May 1971 through the following March, with the participants working independently after that. According to records, 46 people participated in this private school. There is no detailed record of the ages of these students, but it can be surmised that the majority of them were around 20 years of age.

What did Takamatsu want to happen at this *juku*? His own statement on this subject can be found in the ads he placed in the art journal *Bijutsu Techô* looking for students. He offered to those interested in attending, “a place for thought and experience about art in general and other various matters.” This was also related to the fact that public educational institutions had lapsed into disarray thanks to the protests against the existing power structure by the Japanese university students of the day (just like similar protests by liberal students in America and Europe).

In 1971, the *juku* curriculum that Takamatsu was directly involved in consisted of Takamatsu himself lecturing to the students from the texts of Laozu, the ancient Chinese philosopher; special lectures by invited outside speakers; assignments of topics and the students creating art works in the classroom, and the mutual critiquing in the classroom of works that students had created at home and brought in for discussion. Takamatsu was assisted in this curriculum by Tashima Renji (b. 1948). Further, the art critic Nakahara Yusuke (b. 1931) was one of the outside speakers involved.

This *juku* was not a place established by Takamatsu to disseminate his own artistic or creative theories. However, examination of the texts of his lectures and the memos he wrote on the creative assignments he gave to his students in the classroom reveal the same type of intellectualism as his own works on “shadows” and “perspective methods.” These materials provide a much more detailed and intricate notation of his thoughts than the texts he published in public magazines and other forums at the time.

This report presents Takamatsu's own thoughts as derived particularly from the records of his almost one-year period of *juku* activities in 1971, information that was previously not available in detail.

(Translated by Martha J. McClintock)

千葉市美術館研究紀要
採蓮 第十二号

二〇〇九年三月三十一日発行

編集・発行―財団法人千葉市教育振興財団
千葉市美術館

〒261-8733 千葉市中央区中央三―十八
電話〇四三―二二一―二三一(代)

制作―印象社

Bulletin of Chiba City Museum of Art
Siren No.12

March 31, 2009

Edited and Published by
Chiba City Museum of Art
3-10-8 Chuo, Chuo-ku, Chiba 260-8733 JAPAN
Phone. 043-221-2311

Produced by
Insho-sha

ISSN 1343-148X